

転生破壊者の弟子

ハツタリピエロ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『個性』という超常的な力が日常となった世界で怪人が世界を脅かしていた

これは無個性の少年鏡レンがある人物から力を受け継ぎヒーロー、仮面ライダーとなり世界を守る物語だ

目次

鏡	レ	ン	o	r	i	g	i	n	—	1
塩	崎	茨	o	r	i	g	i	n	1	15
塩	崎	茨	o	r	i	g	i	n	2	25
特訓	そして	ダーク	デイ	ケイ	ド	V	S	デ	イ	
ケイ	ド	—								41

鏡レンorigin

「はあ……」

僕、鏡レンはトボトボと帰路を歩いている。

僕は小さいころからヒーローに憧れていました。保育園の皆も強くて格好よくて人々を助ける……そんな夢のような存在に憧れていました。そしてどんな個性が出るのかとワクワクしていました。

でもー

『無理だね。諦めた方がいいよ』

齢4歳の僕に突き付けられたのは無個性という現実でした。

病院でそう言われて帰った後の僕は必死に頬を抓ったりしました。

『夢なら覚めてくれと』

時には手を翳して火を出そうとしたりしました。

しかしどうやっても無個性という僕の現実は覆りませんでした。

それからというもの一緒だったはずの友達は皆僕から離れていき、親も僕を邪険にして強個性の双子の弟を可愛がりました。

両親は煩わしいものとはばかりに僕を絶縁してお爺ちゃんの家で預けました。

そんな無個性の僕を可愛がってくれたのはお爺ちゃんだけでした。

そのお爺ちゃんも去年に亡くなってしまいました。

僕はバカにされようとも夢を捨てきれませんでした。

でも改めて現実の厳しさを思い知らされました。

意気込んで雄英のヒーロー科入試を受けましたが返ってきたのは不合格という結果でした。

自慢じゃないけど今まで努力してないってわけじゃない。それなりに鍛えてきた自信もある。

だからこそそのすつきりとした諦めがありました。がそれ以上に悔しさが芽生え始めました。

“なぜ自分は努力してもスタートラインに立つことすら許されない?”

“なぜ自分は夢を追いかけることすらできない?”

僕の中に残ったのは喪失感だけでした。

どうしようもない怒りが身体を込み上げてきました。がすぐに虚しいことだと気付きました。

そして現在――

「はあ……」

僕はトボトボと重い足取りで歩いていた。

「あつ……もうこんな時間……」

僕はスマホの時刻を見てさつきと帰るようにする

最近ヒーローたちは大きな問題を抱えている。それはヴィランとはまた違う怪人と呼ばれる人々を脅かす存在だ。

奴らは3年ほど前から突然現れた。頻度は少なめだが出現すると必ずといっていいほど尋常じやない被害が出る。それは並のヴィランとは比べ物にならないほどに。

中には鏡から突然現れたりする個体や、不死身の個体、高速で蠢く種類など一握りのプロヒーローしか敵わないような個体も出てきている。

僕が足を早めると

ピキッ……！

「なっ!？」

後ろの空間が突然ひび割れてその中から出てくるのは

「ウソ………だろ……」

灰色のムカデのような怪人に身体がステンドグラスをイメージさせる馬の怪人が僕を威嚇するように睨んでいた

ムカデの怪人が振るった鞭が僕を吹き飛ばして、僕は壁に叩きつけられる
ああ……僕……なにも出来ずに死ぬのかな……

と壁に倒れている僕に迫ってくる怪人たちだったが突然動きが止まった。

どういふことだ……!?

ブウン……!

僕が驚愕に染まっていると横からオーロラのようなものが僕を包み込んで僕は意識を失った。

次に僕が目覚まして見えたものはどこかの建物の天井だった。

「……は……?」

「目が覚めたか?」

「誰!?!」

僕が振り向いた先にいたのは僕とそう歳が変わらない男だった。

「貴方は……ヴィランですか……?」

「違う違う。あの時お前を助けたのは俺だけ?」

「つてことはあのオーロラは……貴方の個性ですか?」

「んまあそんなとこだ」

「すつ、すみませんでしたっ!」

「えっ!? ちよおっ!?」

僕が渾身の土下座をするとその人は戸惑っていた

「なにになにつ!?」

「いや、だつて助けてもらつたのに……! ヴィランと勘違いしてしまつて……!」

「いやそれはしょうがないんじゃないか……? それに気にしてないから頭を上げてくれ」

「は、はい……」

僕が頭を上げると同時に僕の腹がクウ〜と鳴った

「／／／!!」

「ハハハ、お腹すいてるんだろ? ほら軽いものしかないが、どうぞ」

「あ、ありがとうございます……」

僕はそう言われて運ばれたおにぎりを頬張った。

「どうだ? 言うほど美味しくないだろ?」

「いえ……美味しい……!!」

なんだろう……そんなに美味しくないはずなのに……すごい……暖かくて美味しい……

思わず涙が零れてきた

「大丈夫か？」

「はい……」

僕は渡されたハンカチで涙を拭く。

こんなに暖かいご飯はお爺ちゃんのご飯以来だ……

「辛かったんだな……」

え……？

「親にも、友達にも個性だけで裏切られたなんてどれだけ悲しい事か……夢を追い求められない悔しさも……だけどよく耐えた」

「どういうこと……？ 僕の過去がこの人にはわかるってのか!？」

「貴方は……」

「でもお前は世界を恨むことなく前を歩き続けた。そんなお前はきつと……誰かのヒーローになれる」

ツ……!!

僕が一つだけお爺ちゃんに後悔があるとすれば……

『レンよ。夢を見るのは悪い事ではないが……現実というものも見据えねばならんぞ』

あの時言っただけは……！

「本当に……僕は……ヒーローになれるのですか……？」

「ああ、お前はヒーローになれる」

「うっ……!!うわああああああ!!」

この言葉だったんだ……!

僕は泣いて……ただひたすらに泣いた……

そして泣き止むと

「ごめんなさい……」

「いや気にしてないから土下座止めなさい」

僕は涙でこの人の服を汚してしまった。だから……

「もういいから」

「は、はい……」

僕は気になったことを聞いてみることにした

「あの……さっきなんで僕の過去が分かったんですか?」

「……それは今は言えない。だがお前がヒーローたる存在になれた時に教えよう……時

間か……」

「あ、あの……?」

手から光がポワツと輝くとなにかバッククルのようなものがその人の手の中に現れて、

そして僕にバッククルを渡してくれた。

「これは……?」

「これは……君が本当にヒーローになりたいと思った時に力を貸してくれるはずだ……じゃあな」

「あつ、あのっ!」

僕が質問しようとしたがその人は突然目の前から姿が消えた。

……

「あの人は結局何だったんだろう……?」

僕は建物を出てみたがそこは僕の街の外れだった。

商店街を通って帰ろうとしていると

ドガァン!

「なんだ!」

僕が向かった先で見たのはさっきの怪人たちによる惨劇だった。

逃げ惑う人々を怪物が襲っている

「ひっ!」

僕も怖くて逃げようとしたその時、目の前に小さな女の子が倒れていた。上からは建物の瓦礫が落ちてくる

それを見た瞬間僕の身体はその子に向かって動き出していた

そして瓦礫から少女を抱えて瓦礫を回避した。

でも……目の前に怪人が放った衝撃波が僕に向かってくる。

ああ……今度こそ死んだ……

と思っていたら

『よくぞ、勇気を振り絞った……おまえになら……我らの力を受け継ぐに値する……』

そして僕の手にはさっきのバツクルが握られていた

「これは……それに貴方たちは……!？」

とふと見てみると僕以外のすべてがスローモーションのように遅くなっていた。

そして目の前にいるのは何十人もの仮面の戦士たち

『我らは今はお前の中に眠つてある……だがおまえが覚悟を決めれば我らは戦える……』

おまえに……ヒーローとしてこの世界を守る覚悟があれば……』

僕の……覚悟……

『おまえの闇はわかつている……嫉妬……羨望……絶望……だからこそ……我らの闇を受け止められる……あとはお前の気持ちしただい』

「……」

『おまえが本当になりたいものを思い出せ……さすれば……力は自ずと手に入る……』

僕の……本当になりたいもの……

「僕は……ヒーローになって……助けてい！人々の希望になりたい！」

『覚悟は出来たか……ならば……我らがお前の力になってやろう……』

そして止まっていた全ての時が動き出した。

僕は怪人の攻撃を避けてバックルを腰に当てるとベルトとして装着されてライドブツカーから一枚のカードを取り出す。

「……変身！」

『KAMEN RIDE DARKDECADÉ!』

幾つもの影が重なって僕は黒の戦士ダークデイケイドとなった。

敵は……魔兵グールに下級バグスター、星屑忍者ダスタード……奥にいるのはセンチピードオルフェノクにホースファンガイアか……

下級怪人が襲ってきたが僕はライドブツカーをソードモードに変化させて次々に斬り捨てていく。そしてライドブツカーから一枚のカードを取り出す。

なぜこれかはわからない。でもこれだと確信できた

『KAMEN RIDE GAOH!』

バックルにカードを装填すると僕の周りにアーマーのようなものが出現して僕に装着されて僕はワニを沸騰とさせる仮面をした戦士ガオウへと姿を変えた

『ふん……俺様を呼び出したからには情けない戦い方はするんじゃないぞ』

僕の頭に誰かの声の流れ込んできたが不思議と驚かなかった。そして今ならわかる。僕はこの人の力を受け継いだのだと。

そしてガオウガツシャーを手に持って襲ってきた敵を次々に薙ぎ払う。

不思議だ……どうやって戦ったらいいかわかる……まるで僕の身体がなにかに動かされているかのようだ……

僕の身体を動かしているガオウの戦闘センスは凄まじいの一言だった。

相手の攻撃を受け流しては一瞬の隙についてのカウンター。そして相手の防御を崩す技術

僕は怪物たちの群れに突っ込んでいくと周りを囲まれる。

だがこれが僕たちの狙いだ！

『FINAL ATTACK RIDE GAGA GA GAOH!』

ガオウガツシャーにエネルギーがチャージされ先端部が射出されると円を描くように回転すると先端部もそれに反応して敵を斬り裂いて薙ぎ払い一瞬遅れて爆発が起る。

ガオウの必殺技タイラントクラッシュによって初級怪人全てが葬られ残ったのはセブンチピードオルフェノクにホースファンガイアだけだ。

『ふん……少しはマシな戦い方じゃねえか……』

僕の頭にあの人の声の流れるとバックルからカードが飛び出して僕はダークデイケイドに戻る

そして次にライドブッカーから飛び出したカードを僕は装填する。

『俺の力を……誰かを守るために使ってくれ……』

『KAMEN RIDE CARRIS!』

『CHANGE!』

僕はカマキリの仮面ライダーカリスに変身すると

『FORM RIDE CARRIS WILD!』

『EVOLUTION!』

ワイルドカリスになった僕は専用武器ワイルドスラッシュャーを手に持つ。

センチピードオルフェノクが鞭を振るってくるが鎌モードにして斬り裂いて防ぎ、鞭の先端を引っ張って引き寄せたセンチピードオルフェノクを斬り裂くとセンチピードオルフェノクは灰と化した。

ホースファンガイアが逃げようとしたが

『FINAL ATTACK RIDE CACA CARRIS!』

必殺技ワイルドサイクロンでホースファンガイアを吹き飛ばすとホースファンガイアはガラスが割れるように消滅した。

そして怪人たちにやられた人を見て

『ATTACK RIDE RECOVER!』

光が傷を負った人たちを包み込むとその傷がどんどん和らいでいく

僕が帰ろうとした時

「そこのおまえ!どこのヒーローだ!？」

マズい!僕は免許なんて持ってない!どうしよう……!」

出した結論は

『ATTACK RIDE AURORA CURTAIN!』

逃げるが勝ち!

「まっ、待てっ!」

オーロラカーテンは僕がくぐるとすぐに消えた。

「あの人は……一体……」

僕はいまだにこれが夢なんじゃないかと思っていた

でもすぐに現実だとわかった

嬉しさもあったのだが同時にこれは普通のヴィランに向けると危険なものだともわ

かった

(制御できるようにならないとね)

言い忘れてたけどこれは最高の力を受け継いだ僕がヒーローになるまでの物語だ

塩崎茨 origin 1

僕は翌日の日曜日、あの廃ビルにいつてみることにした。

錆びれた扉を開けてあの部屋に行く

「待ってたぞ」

あの人ソファに座っていた。

僕は何から切り出せばいいかわからなかったが

「まあとりあえず座れ」

「は、はい……」

向こうから切り出してくれたので僕が対になるソファに座った。

「まずは……ここに来たということはダークデイケイドの力を受け継いだってことだな」

「はい……あ、あの力っていったい何なんですか!？」

「まあ落ち着け。そうだな……あの力は俺の力の半分のようなものだ」

「この人の力!? この人も仮面ライダーなのか!？」

「あ、あの……仮面ライダーってそもそも何なんですか……? あの人たちは……この世

界でも見たことがないヒーローたちでした……」

「そうだな。順序良く説明するなら……まずこの世界に現れた怪人たちは元々別世界のライダーワールドの生命体だ」

別世界!?まさかそんな……!?

「ちよつと待つて下さい……つてことは……」

「そう。俺も異世界からやってきた仮面ライダー、デイケイドだ」

デイケイド……

「貴方は……なぜこの世界に……」

「そうだな……あの怪人たちは世界を渡つて人々を脅かしている。俺はそれを止めるために世界を渡り歩いてる。だが世界は広い。俺一人だけだと手に負えないんでな。そこで素質ある何人かにライダーの力を託すことにした。それがお前だ」

驚きの情報が多すぎて頭がこんがらがっている

「でも……僕なんかでよかつたんですか?だって僕は「無個性だろ?そんなの関係ねえよ」ツ!」

「ある人は言った。俺には夢がない。でも夢を守ることはできる」つてな。夢がない者でも誰かも夢を守ることはできる。おまえは夢を捨てずに前に進み続けた。そして誰かの夢を守るためにダークデイケイドライダーに認められた。ライダーになるのに

個性の力なんて関係ない。大事なのは勇気を振り絞れる覚悟だ」

「……ううう……!」

「おいおい泣くなよ。そんなんじや泣き虫ヒーローだつてお言われるぞ?」
「だつて……!」

5分後、泣き止んだ僕は目の前にあつた菓子に手を伸ばす

「美味しいか?」

「はい」

「じゃあこれからは怪人たちを任せられるか?」

「はい……怖いですが……覚悟はできています」

「そうか。でも最初にお前が戦つた怪人は下つ端もいいところだ。中には格が違う怪人だつている。気をつけろよ」

「ハイッ!」

「そうか。で?これからどうする?」

「え?」

「ヒーロー科……落ちたんだろ? なにかヒーローになる宛てはあるのか?」

「……あつ!」

「……とりあえず雄英の普通科に行け」

「は……」

こうして僕は雄英高校普通科を受験することになった

……

僕は自分が受け継いだ力をよく知っておこうかとライドブツカーからカードを取り出して並べてみた。

だがとにかく多い。ライダーカードだけでもこんなにあります。

ライダーカード

・ G 3、ギルス、アナザーアギト、G 4

・ ナイト、ゾルダ、王蛇、シザース、ライア、ガイ、ベルデ、インペラー、タイガ、オルタナティブ、オルタナティブゼロ、オーディーン、リユウガ、

・ カイザ、デルタ、ライオトルーパー、サイガ、オーガ

・ ギャレン、カリス、レンゲル、グレイブ、ランス、ラルク、

・ 威吹鬼、轟鬼、斬鬼、歌舞鬼

・ ガタツク、ザビー、ドレイク、サソード、キツクホツパー、パンチホツパー、ダークカブト、コーカサス、ヘラクレス、ケタロス

・ ゼロノス、NEW電王、ガオウ、ネガ電王、幽汽、G電王

・ イクサ、サガ、ダークキバ、レイ、アーク

・ディエンド、キバラー、アビス
 ・アクセル、スカル、エターナル
 ・バース、アクア、ポセイドン
 ・メテオ、なでしこ、イカロス
 ・ピースト、メイジマン、白い魔法使い（ワイズマン）、ソーサラー、
 ド
 ダークウイザー

・バロン、龍玄、斬月、マリカ、マルス、ファイフティーン
 ・マツハ、チエイサー、ダークドライブ、ゴルドドライブ、ルパン、ハート、3号、4
 号

・スペクター、ゼロスペクター、ネクロム、ダークネクロム、ダークゴースト、エクス
 トリーマー

・ブレイブ、スナイプ、レーザー、ゲンム、パラドクス、ポッピー、クロノス、風魔、
 アナザーパラドクス

・クローズ、グリズ、ログ、ブラッドスターク、ナイトローグ、リモコンブロス、エ
 ンジンブロス、ヘルブロス、エボル、マッドローグ、キルバス、ブラッド

・ゲイツ、ウオズ

多すぎでしょ……ライダーってこんなにいるの？

いやあの人がライダーの中には敵側についていた奴もいるという。つまりこの中の何人かも元々は敵だったということかもしれない。

そうか……闇というのはそういうことがだったのか……

次にフォームライドカード

ライダーカードだけでもこれだけなのだからフォームライドカードはそれ以上だ。

まあでもライダーの中にはフォームライドしないやつもいる。

それでも多すぎるので紹介は割合

次にアタックライドカード

これもライダーカードよりも多いので紹介は割合

そして最後にファイナルアタックライドカード

これは各ライダーの数だけ存在していた。

といっても試した見たところ、ライダーには複数の必殺技を使える者もいるのでその状況に応じて技を選ぶことができる。

とまあとにかく多かった。よくこんなに入るなあって気になって覗いたが中は見えなかった。もしかして異空間に収納されているのかな?と思った。

僕はライドブッカーにカードを収納してジャンパーを着て家から出る。

今日は雄英高校の入試なのだ。と言っても普通科なだけだね

入試は問題なく終わった。

そしてせっかくの都心をブラついていると

「うん？」

手帳のようなものが落ちていたので拾って申し訳ない気持ちで中を見る。

そこには今日の予定が書かれていたので届けてあげようとの後の予定の植物園に行くことにした。

中には写真が入っていたので見つけるのは難しくなさそうだ。

そして植物園にいたその人を見つけたので声をかけようとした時

ドゴオン！

「なんだ?！」

轟音の方から怪人が現れた。

怪人が僕が探していたその人を襲おうとしていたが咄嗟だったのかその人も個性と思われる髪の毛のツルを使って拘束しようとした。だが怪人は大きな爪を使って次々に蔓を斬り裂いていく

そしてその人に爪を振るおうとしたので

「危ないっ!」

とつさに割り込んで腕を怪人の腕を掴んだ。

「今のうちに！」

「はっ、はいっ！」

その人は恐怖のせいか目に涙を浮かべていた。

「お前……なんであの子を襲うんだ？」

「それが契約だからな！」

ふざけるなよ……そんなことのためにあの子は恐怖しなけりばならなかつたのか

……!?

怒りがこみ上げてくるが今の会話で確信した。

こいつは人の願いを歪んだ形で叶えて過去を破壊する怪人、イマジンだ

あの人曰く中には人のために戦ったイマジンもいるそうだがこいつは明らかに悪だ。

そしてそのままガラスを突き破って違う庭園へ行く。

怪人が掴まれた腕を強引に振り払って外す。

「邪魔するならテメエも消してやる！」

「さーてそれはどうか？」

僕はバックルを腰に出現させると

カードを手を持つ。

「変身！」

『KAMEN RIDE DARKDECADE!』

僕がダークデイケイドに変身すると

「な!?仮面ライダー!?!バカな……!何故この世界に!」

「さあ……お前の罪を数えろ」

「ぐっ!調子に乗るな!」

怪人、モールスイマジンが向かってきてきてその大きな爪を振るおうとしたが僕は寸前で避けて回し蹴りを後頭部に叩き込む。

モールスイマジンはよろけるもすぐに向かってきたが

『KAMEN RIDE WISEMAN!』

『CHANGE!NOW!』

前に現れた魔法陣にモールスイマジンは弾かれてそれに潜った僕は白い魔法使いに変身した。

モールスイマジンが再び爪を振るってくるが専用武器ハーメルケインで受け止めてそのまま上に逸らさせて体勢を崩すとモロに叩き込む。

モールスイマジンは倒れるもすぐに立ち上がって爪を振り回してくるが僕は躲し続ける。

そして大振りの攻撃になった時に横に回りこんで横に回転してモロに蹴りを放って吹き飛ばす。

『ATTACK RIDE CHAIN!』

魔法陣から飛び出した鎖がモールスイマジンを拘束させると

『ATTACK RIDE EXPLOSION!』

モールスイマジンに手を向けると魔法陣を出現させて爆発させ、攻撃するとそれだけでモールスイマジンは爆発四散した。

だが爆発の影響で植物が燃えそうだったので慌てて

『ATTACK RIDE HYDRO!』

地面に魔法陣を出現させて水流を起こして鎮火させる。

僕は変身を解除するとその場からすぐに退散した。

しかしこの時僕は物陰にいた存在に気づかなかった。

「あの方は……」

……

「なんなんだよ……!あの野郎は……!こうなったら……!」

少女に忍び寄る悪意

その手に握られていたのはメモリのようなものだった。

塩崎茨 origin 2

僕は無我夢中でオーロラカーテンを開いて逃げてしまった。

「あつー！しまった……返すの忘れてた……」

そう。手帳を持ってきてしまったのである。

「どうしよう……」

手帳には写真以外情報がなかった。

結局答えを出せないままその日を終えた。

次の日に交番に向かおうと支度を整えていたら

ピンポン

「ん？誰だろう」

僕は玄関を開けるとそこにいたのは

「あつー！あの時の！」

「はい……覚えていてくれて嬉しいです……私は塩崎茨といいます。先日はありがとう

ございました……」

「いえ、誰かが困っていたから助けただけです」

「それでもです……本当にありがとうございます」

そう言つて微笑む塩崎さんはとっても可愛かった。

あれ？

「んでもよく僕の家がわかりましたね？」

「あつ、そういえばこれを返しにきました」

「これつて……僕の生徒手帳!？」

あの時に落としていたのか!？」

「ハハハ……ありがとうございます……あつ、僕も返すものが」

「あつ、私の……ありがとうございます……」

僕も手帳を塩崎さんに手帳を返すと

「あつ、鏡さん。この後時間がありますか？」

「大丈夫ですけど……」

「ならお礼をさせてもらえませんか？私が今日のお昼ご飯奢ります」

「いやいいですよ！そんな大したことしてないのに……」

「何を……私を助けてその上怪人と戦つてくださった貴方に礼を返さないと……私は己を鞭で打たねばなりません……」

「いやいや……そんなことしなくても……えつ……ちよつと……待つてください……僕

が……変身してたところ……見てましたか……?」

「はい……」

ウソだろ!?! 正体見られたのかよ!

「あー……できれば正体は隠していただけたら……」

「わかっております……ですが私は貴方の行為は人々を助けるための本当の正義だと
思っておりますよ」

どうしよ……とにかくこの人を信じるしかないか……

「そういうわけですので恩は返させてください」

「あー……それなら……お言葉に甘えて……」

こうして僕と塩崎さんのお出かけが始まった。

……

???
side

畜生……!!

なんであんなやつが塩崎さんと一緒にいるんだよ……!!

ぶち殺してやる……!! あいつも……!! 塩崎も……!!

『WEATHER!』

……

あの後僕は塩崎さんが服を新調してくれたのがよくわからなかったがすぐに理解した……

僕は塩崎さんとイタリアンレストランに来ていた。これが普通のレストランならいいんだよ……

「あ、あの……僕そんなに金持っていないのですが……」

「ふふ、大丈夫ですよ。私が奢りますから」

微笑む塩崎さんだったがどう見ても普通の金額じゃない。

もしかして塩崎さんってお嬢様？

そして店の雰囲気もあってガチガチに緊張している。

「お待たせしました。前菜七種盛り合わせです」

「ありがとうございます」

僕らの前に運ばれたのはソースがかかった肉や野菜などの七種の盛り合わせだった。

僕は慣れない手つきで前菜を口に運ぶ。

緊張していた僕だったがとりあえず美味しかったということだけはわかった。

なんだこれ……!?!この世にはこんなに美味しいものがあるのか……!?!

僕は落ち着いて次々に前菜を口に運ぶ。

「美味しいですか?」

「はい……」

「それならよかったです」

微笑む白ドレスの塩崎さんが可愛くてつい赤面してしまった。

次に運ばれたのはモッツァレラチーズが入ったアマトリチャーナというパスタだった。

パスタを口に運ぼうとしているが上手くいかない。

なんとか口まで運べたが口にソースがついてしまった。

ナプキンで拭こうとしたが

「あらあら……ジツとしてください」

え!? ええ!?

塩崎さんがナプキンを持って口をふきふきしてくれた。

「……ありがとうございます」

「いえいえ……気にしないでください」

その後も料理が運ばれてきたが羞恥心であまり味がわからなかった。

ただ美味しかったとだけは言っておこう。

会計をこっそり見てみたがやはりとんでもなく高かった。

それをカードでポンって払うあたりある意味凄いなと思うってしまう。

レストランを後にした僕たちは並木通りを歩いていた。

「今日はありがとう」

「いえ……貴方がくれた希望に比べれば……」

そう言つて俯く塩崎さんを覗き込むと

「……どうしました？」

「いや、可愛いなつて」

「ふえっ!？」

いきなり赤面する塩崎さん。

「あああー!ごめんないさい!いきなり!」

「いえ……大丈夫です……」

お互いに目を合わせられていないが

「……塩崎さん?」

塩崎さんが手を差し出してきた

「……手つないでほしいんですか?」

僕の問いに塩崎さんは赤い顔のままコクつと頷いた。

「じゃ、じゃあ……」

僕は差し出された手を握つて塩崎さんの隣に行く

「……………」

「……………」

ちなみにこの様子を見ていた周りの男たちは

((爆発しろ!))

そのまま時計屋に行ったり、雑貨屋など街を巡って

「今日は楽しかったよ」

「はい……………こちらもです……………」

「ありがとう」

「……………あつ、あのっ!」

「なに?」

「連絡先……………交換してくれないでしょうか……………」

……………なにこの可愛い生き物は

僕と塩崎さんはお互いに連絡先を交換し合うと塩崎さんはタクシーで帰っていった。

僕はそのまま廃ビルにむかった。

「ほ……………それはそれは……………」

あの人……………いや師匠がニヤニヤした目で見てくる

僕はいたたまれなくなつて別の部屋に逃げると

ブウン！

塩崎さんからの着信か……

「はい」

『おっ！出たか……！クソ野郎が……！』

「……誰だおまえ」

『殺気立つなよ！』

「……誰だつて言っている……塩崎さんじゃないだろ」

『ハハハハハ!!』

「答えろ！」

『そうだな……あの怪人と契約した奴と言えばわかるか？』

「テメエが……何の用だ！塩崎さんになにをした！」

『そう焦るな！俺の願いはな……お前に死んでもらいたいんだよ』

「……断つたら？」

『こいつを殺す』

『鏡さん……！申し訳ありません……！』

「塩崎！」

『つてことだ！町はずれの廃工場に1時間以内に来い！ヒーローや警察には連絡するな』

！』

『ダメです！私のことは気にせず！』

『余計なことを言うな！』

『きやあ！』

「やめろ！……わかった！」

僕は足を早めて工場に向かう

・・・

へ～……クソ野郎が……どれ……少々お灸をすえさせますか

・・・

僕が廃工場につくと塩崎さんが拘束具に挟まれていた

そしてそこにいたのは

「ドーパント……！」

「やつと来たか！この前は妙な力で邪魔されたからなく！その報いは受けてもらうぜ！おつと個性を使おうとするなよ？したらこいつを即座に殺す」

「ダメです！私には構わず！」

動かなかった僕はウェザードーパントの蹴り飛ばされて倒れた僕に何度も蹴りを浴びせる

「何が目的だ……なんでこんなことを……」

「そうだな……冥途の土産に教えてやるよ。俺はこいつへの愛があったのにこいつはそれを拒否しやがった!」

「まさか……暗闇さん!？」

「そうだよ!よく覚えていたな!そうだよ!おまえのせいでこいつは死ぬんだ!」

「はっ……クソ野郎だな……」

「テメエは黙れよ!なにが仮面ライダーだ!テメエなんか塩崎と一緒にいるなんて許されないんだよ!!たかが強個性に生まれただけだからって!ふざけんなよ!」

「やめてください!」

「俺が死ぬば……塩崎は……助けてくれるんだよな?」

「ああ!約束は守るさ!（バーカが!どっちも皆殺しだ!）」

「ダメです!貴方が死ぬなんて……!」

「君が助かるなら……僕は……このまま死んでも……悔いはない……だって……ずっと……無個性で……皆から愛されなかつた僕を……見てくれた君だから……」

「ダメです……!貴方が死ぬなんて……鏡さん……!」

「さあ死ぬ!」

塩崎さん……悲しまないで……

僕が死を覚悟した時

「そこまでだ」

『ATTACK RIDE PAUSE!』

その音声が届まなかったな……このクソ野郎……邪魔されないように兵隊放つてやがった

「なっ!?! どういうことだ!?!」

「師匠……」

「待たせて済まなかったな……このクソ野郎……邪魔されないように兵隊放つてやがった」

「ありがとうございます……」

「鏡さん!」

『ATTACK RIDE RECOVER!』

光が僕を包み込むと僕の傷が癒えていく

「さあ、レン、この外道に天誅を食らわしてやれ」

「ハイっ! さあてと……覚悟しろよ」

「はっ! テメエごときどうってことねえんだよ! 多少予定が狂ったが……どのみち計画に支障はねえ!」

「バカかおまえ? レンが解放された以上お前に勝ち目はねえんだよ」

僕はダークデイケイドライバーを出現させると

「変身ッ！」

『KAMEN RIDE DARKDECADÉ!』

僕は変身するとすぐにあのカードを取り出す

『ふん……俺を使うからには大切な何かぐらい守ってみせろ』

その戦士は悪に堕ちてしまったが自らの感情を犠牲にして大切なもののために戦った英雄

『KAMEN RIDE ETERNAL!』

僕は悲しみの戦士エターナルに変身すると彼の決め台詞を奴に言い放つ

「さあ……地獄を楽しみな！」

「地獄に落ちるのはテメエだ！」

ウエザードーパントが冷気を放ってきたが僕はエターナルローブで防ぐと

『ATTACK RIDE ZONE!』

ウエザードーパントの背後に移動した瞬間に僕は右足キックからの左足の回し蹴り、更にハイキックでウエザードーパントを蹴り飛ばす。

「ぐっ！ならー！」

奴は雷雲を呼び起こすがこのエターナルローブは電気をも無効化させることができ

る

だがこのままじゃ奴に近づけない。なら

『ATTACK RIDE ACCEL!』

加速の力を纏って雷をジグザクに避けて接近してエターナルエッジを横に振るって斬りつける

「グワツ……！テメエ……！」

「これで終わりだ」

『FINAL ATTACK RIDE E E E ETERNAL!』

そして必殺技ブラッディヘルブレイドでウエザードーパントを斬りつけると爆発が起こって奴の身体からウエザーメモリが出て壊れる。

……

あの後師匠が呼んだ警察が暗闇だっけ？を捕まえて連れていった。

僕は警察が来る前にそそくさと退散して家に戻った。

ピンポーン

僕は玄関に向かうと

そこには塩崎さんと塩崎さんに似た女性がいた

多分

「遅くにすみません。鏡さん。あつ、私の母の塩崎咲です」

「初めまして鏡さん、塩崎咲です」

「あつ、はい……改めまして……鏡レンです。それで何の御用で？」

するといきなり頭を下げられた。

「この度は貴方のお陰で娘は救われました……感謝してもしきれません……」

「あつ、いや頭を上げてください。僕は……誰かのために立ちたかったですから」

咲さんに頭を上げるように言う

「それで先ほどの質問ですが茨が聞きたいことがあるのもそうですが……貴方に茨を任せたいというのもあるのです」

「へ？」

「茨は友達がいなくて……この子、あまり友達以上の接し方が得意じゃないんです……ましてや今回のことで男性に恐怖心が抱いてしまっているのもあって……それで任せていいですか？」

「いや僕も男ですよ？」

「貴方に助けられているので大丈夫ですよ。茨は？」

「大丈夫です。お母さん、鏡さんとなら……」

「そういうわけでしたら……わかりました！任せてください！」

そして咲さんには居間待ってもらって塩崎さん、いや茨って呼んでくれって言われたんだよな

茨を家にあげると

「で？聞きたいことって？」

「鏡さん……いえレンさん……貴方は元々無個性っていつてましたよね？ならあの力は……」

「ま、気になるよな。あの力は僕の師匠から受け継いだ力なんだ」

「そうでしたか……あと貴方たちはあの怪人のことについて詳しくかった……あれは一体何なのですか？」

師匠には信頼ある人になら話していいって言われてるし……よし！

僕は知ってる限りのことを話した。

「そうだったのですか……」

「まあ信じられないような話だけだね「いえ……貴方の話ですもの……信じています……怪人たちを倒すための力……凄いですのね」

「いや……僕は元々強くなんて「そうじゃありません。貴方の勇気を振り絞る覚悟……貴方は立派なヒーローです」ッ……！ありがとう……」

思わず涙が零れてしまった。

そしてその後はたわいもない話をして帰る時に

「レンさん。一つ頼みがあるのですが……私もその師匠さんに稽古をつけてもらえないでしょうか？」

「うくん……僕は良いし、多分師匠もいって言うと思うけど一応聞いてみないとね。ちよつと時間貰うけどごめんね」

「いえいえ……ありがとうございます」

そして茨たちを見送って僕は家に戻った

・・・

「レンさんと話しているとドキドキするこの気持ちは……ふふっ……そういうことですか……レンさん……私は貴方に……」

茨の心の中に淡い恋心が芽生えた瞬間だった。

特訓　そしてダークデイケイドVSデイケイド

茨の頼みだったが、あの後師匠にお願ひしたら快く了承してくれた。

そして今日、茨と一緒に師匠が待つビルへと向かう。

「よく来たな。君が塩崎さんだな。レンから話は聞いている」

「はい、初めまして。塩崎茨です」

「それで確認するよ？教えるのはいいし、失敗するのも構わないがついてこれる覚悟はあるかい？」

「はい……私もレンさんのように……人々の希望になれるヒーローになりたいです」

「……よし！君の決意はわかった！いいよ！」

「ありがとうございます！」

よかったね、茨

「さてと場所を移すか。ここじゃ狭いし」

師匠が指を鳴らすと周りの景色が変わって僕たちは辺りがピンク色の不思議な空間に移動していた。

「……は……!?」

「ここは世界と世界の狭間のようなものさ。ここなら個性を思いっきり使っても問題ない」

「流石師匠」

僕は内心驚きつつもまあ師匠のやることはいつも規格外だから気にしないことにした。

「じゃあ特訓開始な。レンは仮装怪人との戦闘訓練な。塩崎は……君の戦闘において重要なのはツルの強度と耐性だな。何故だかわかるか？」

「それは……どれだけ数が多くても捌かれたり、高熱や冷氣などには数が意味を成さないからでしょうか？」

「ピンポーン！正解だ！じゃあやることは一つ！限界突破だ！俺が蔓をどんどん斬り裂いていくから塩崎は蔓を出し続けて蔓を出す速度を鍛えようと同時に耐久力を上げる特訓だ！ついてこれるか？」

「ハイっ!!」

茨がどんどん蔓を出していくが師匠は手にしたライドブツカーで次々に斬り裂いていく。生身なのにあれほどの実力なのは流石としか言えない。

僕の方は師匠が呼び出した仮装怪人を相手にしている。

リザードマンがスケイルソードをブンブン振り回してくるが剣の軌道を読んで躲す。

そして下からの蹴り上げでスケイルソードを弾き飛ばしてそのまま突っ込んできたリザードマンを蹴り飛ばすと

『FINAL ATTACK RIDE DADA DARKDECAD E
!』

ジャンプして空中で飛び蹴りの体勢になって黒がかかった黄色のカードを突き抜けていき、リザードマンを蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされたリザードマンは吹っ飛んだ先で爆発した。

僕は変身を解除して師匠の元へ向かう。

「おう、終わったか。どうだった？」

「初級や下級怪人はともかく中級になるとやっぱり手強いですね」

「まあ上級なんてものになると最強と呼ばれたライダーたちでも苦戦するからな」

僕が座って水分補給していると

「レンさん」

「茨？」

「疲れているでしょう？肩を貸してください」

そう言って茨が僕の肩に手をかけてきた。

「ふえっ!？」

「ふふっ……力を抜いてください……」

肩をもみもみとほぐしてくれる茨の手はとても柔らかく肌触りがよくとても気持ちよかった。

肩のツボを的確に刺激してくれるので体の疲れがどんどん取れていくのがわかる

「気持ちいですか？」

「ああ……うん……」

「それならよかったです♪」

ああ……癒される……

そして10分間の休憩が終わって肩もみは終了した。

「じゃあ特訓再開するぞ。次の内容は……」

なんだなんだ!どんな試練でも来い!

「レン、俺と勝負しろ」

……What's?

「え……マジですか……?」

「マジだ」

いや無理無理!意気込んだはいいけどそれは無理!師匠半端ねえんだもん!だって

師匠の最強フォームたちはヤバいんだって！アルティメットは単純に強いし、ハイパーは速すぎるし、インフィニティは魔法バンバン打ってくるし、ムテキには攻撃効かないし、それになにより僕が恐れているのはあの存在だ。

“オーマジオウ”

師匠が変身する中の最強の形態でライダーたちの宿敵の上級怪人すら軽くあしらうほどのスペックだ。

あれらが出てきたら僕に勝ち目はほぼゼロだ。

あれに僅かに対抗できそうなのはゴッドマキシマムゲーマーかエボルフェーズ4、ゲイツリバイブぐらいだ。

それらだってほんの僅かの可能性だけだしね

それに師匠自身生身でもライダーに対抗できるほどのチートだからね

「安心しろ。オーマジオウと最終形態には変身しないってことにしてやるからさ」
「ホントですか!?!」

「ああ、だがおまえにも制限はかけさせてもらう。ゴッドマキシマムゲーマーと、エボル、ゲイツリバイブへの変身を禁じる。じゃないと特訓にならないからな」

まあ予想の範囲内だ

「それでどうする?」

「……やりますー！」

「いい返事だ」

そして僕と師匠が相対すると

「変身！」

『KAMEN RIDE DARKDECADE!』

『KAMEN RIDE DECADE!』

「あれが……ディケイド……」

「……行くぞ」

「ッ！ハイ！」

僕と師匠が同時に飛び出してお互いにライドブツカーをソードモードにして斬りつけあう。

後ろに跳んだ僕は向かってくる師匠と切り結び、その勢いを殺さずに横をすり抜けてライドブツカーをガンモードにして師匠に向かって発砲するがカードケースの部分で弾を逸らされた

そして一気に距離を詰めてきた師匠の下から振り上げられた剣撃を横に避けるが右回りに回転した師匠が横薙ぎに振るってきたのでライドブツカーを逆手持ちにして防ぐが、それと同時に師匠は今度は逆回りに回って足払いをかけてきたのをジャンプして

寸前で躲す。

師匠相手に接近戦は不利だ！だったら！

『KAMEN RIDE SNIPER!』

『バンバン！バンバン！バンバン！シューティング！』

『ガシャコンマグナム！』

僕は手にしたガシャコンマグナムとライドブッカーガンモードで連続で射撃する。

師匠は横に走って逃げるが僕もそれに反応して追う

「チッ！ならー！」

『FORM RIDE OOO GATAKIRIVA!』

『ガクタガタガタ・キリツバ・ガタキリツバ!』

ヤバイ。師匠の変身する中間フォームでも厄介な部類に入るフォームだ。

「ハッ！」

師匠がこつちに向くと一気に50人まで分身した

「えええ!!?」

茨も驚いている。そりやそうだ。僕も初めて見たときは驚いたもん

「それならー！」

『FORM RIDE SNIPER SIMULATINGGAMER!』

『デュアルアップ！スクランブルだ！出撃発進！バンバンシミュレーションズ！発進！』

スナイプレベル50に変身してリーダーを使って一斉に狙い撃とうとしたが

『ATTACK RIDE CLOCK UP!』

「なっ、それずるっグワホッ！」

全ての分身たちが一斉にクロックアップして僕は視認することすらできずに吹き飛ばされた。

「だったら！」

『KAMEN RIDE WOZ!』

『スゴイ！時代！未来！仮面ライダーウオズ！ウオズ！』

すかさず次のカードを入れる

『FORM RIDE WOZ GINGAWAKUSEI!』

『水金地火木土天海！宇宙にゃこんなにあるんかい！ワクワク！ワクワクセイ！ギーンガ、ワクワクセイ！』

ウオズギンガファイナリーワクワクセイフォームに変身した僕はこの状況を打破するカードを入れる。

『FINAL ATTACK RIDE WO WO WO WOZ!』

『水金地火木土天海！エクスプロージョン！』

大量の星を呼び出し、上空から雨のように降らせると爆発が連続して起こる

これなら師匠でも……！

「それはフラグだぞ」

え……？

師匠はデイケイドの状態に戻っていたがダメージを負っていなかった

「なんで……そういうことか！」

多分師匠は星が当たる瞬間に分身を一瞬で解除して本体はインビシブルで回避していたんだ

「強くなったな、レン。カードをここまで使いこなせているとは」

やった！師匠に褒められた！

「んじや俺も少しやる気を見せますか！」

『FORM RIDE WIZARD FLAMEDRAGON！』

『ボウー！ボウー！ボウーボウーボオーー！』

師匠が変身したのはウイザードか

「これは見たことねえだろ」

『ATTACK RIDE DRAGO TIMER！』

『SET UP!』

「さあ……ショータムだ」

師匠はウィザードガンを手にして斬りかかってくるが上空から星をコントロールして近づけさせない

だが

『WATER DRAGON!』

「なっ!?!」

後ろの魔法陣から現れたそこからウォータードラゴンウィザードが斬りかかってきた

僕は咄嗟に後ろ退いて避けるがフレイムドラゴンウィザードに接近され、斬撃を受けてしまった。

吹っ飛ばされた僕は転がってその場から脱する

「師匠が……一人……!」

そして連携で向かってきた師匠たちに対して僕は今コントロールできる最大数の星で迎撃している。

なんとか凌いでいるが分が悪い

こうなったらもう一回必殺技で……

「そうはさせないっての」

『HURRICANE DRAGON!』

「また!?!」

今度は頭上から増えた師匠がウィザードソードガンの銃撃で僕がカードを装填させないように妨害してくる

そして地上に降りたウィザードハリケーンドラゴンは後ろ回し蹴りを放ってくるが僕はしゃがんで避けてエナジープラネットをぶつけようとしたが

『ATTACK RIDE BIND!』

地面の魔法陣から飛び出した鎖が僕を拘束する。

その隙にハリケーンドラゴンはその場から退散した。

僕は全身にエナジープラネットを纏って鎖を強引に引きちぎると星を三人のウィザードに放ったが

『LAND DRAGON!』

放ったエナジープラネットは突如出現した石柱に阻まれてしまった

「ウィザードが……四人……」

『『ATTACK RIDE TELEPORT!』』

三人のウィザードがカードをセットすると僕を囲むように転移した。

「「「さてそろそろフィニッシュだ」」」

マズい……このままだと……なら!

『FORM RIDE W O Z G I N G A T A I Y O U!』

『灼熱バーニング! 激闘ファイティング! ヘイヨー! タイヨウ! ギンガタイヨウ!』

ギンガタイヨウフォームに姿を変えていると

『『『FINAL ATTACK RIDE W I W I W I W I Z A R D!』』』

師匠のそれぞれの分身体がドラゴンの各部位を再現して攻撃を仕掛けようとしていた。まだ間に合う!

『FINAL ATTACK RIDE W O W O W O W O Z!』

師匠の分身体がそれぞれの属性攻撃を仕掛けると同時に高熱のエナジープラネットを全方位に解き放った。

すると当然のように大爆発が起こった。

・
・
・

碓side

私は目の前の戦いに何度驚愕しただろう

それもそうだ。

彼らの戦いはトップヒーローすらも超えているといっても過言ではないほどの凄ま

じいものだった。

レンさんが最初押されていたが徐々に打開していつて師匠を追い詰めた。

そして二人の必殺技がぶつかると凄まじい爆発が起こった。私は師匠の作った結界にいるからなんともなかったが中の二人はどうなったことだろう

私は思わず立ってしまい、レンさんの安否を確認しようとしたが煙の中から立った人物がいた

それは……

師匠だった

レンさん！私は結界からであると急いで変身が解除されていたレンさんの元へ駆け

よった

「ちよつと待つてろ。すぐに回復させてやる」

師匠が手を翳すとレンさんの傷がどどん癒えていった。

それでもまだ起きないレンさん

なら……

……

僕が目を覚ますと目の前に茨がいた

「茨……」

「大丈夫ですか？レンさん」

「そうか……僕は負けたのか……」

「でも素晴らしい戦いぶりでしたよ？見てて誇らしかったです」

「……ありがとう」

「いえいえ……」

そして僕は茨の膝の感触の良さに再び眠りについた